

# 新米校長6ヶ月雑感

久留米大学附設中学・高等学校長

吉川 敦

この4月に突如全く未知の中高一貫校の校長に着任した。

本校は、実は、九州北部ではよく知られた学校であり、いわゆる世間的な評価は、全国的に、鹿児島ラサール中学・高等学校と同様である。

本校の方がやや規模が小さく、また、  
医師・研究者等の高度専門職業人に卒業生が集中していることもあり、  
社会的な影響力も若干小さいと想像する。

地方進学校が抱えている問題は、今日の社会情勢下、基本において似た点も多いと思うが、各校(例えば、本校とか)特有の困難もある。

いずれにせよ、赴任してわかったことは、校長の人物の重要性である。  
校長に要求される総合的人格、つまり、教養、見識、判断力、構想力の質が、学校を維持していく上でも crucial であることを痛感する。  
もう間に合わないと思いつつ、全力投球を心掛けています。

ただし、  
ここは、「数学教育の会」であり、本校のことを述べるつもりはない。

## 何を申上げるべきか：

唐突であるが、日本の学年制度全体について提案したい。  
何年か時間を掛けながらも、早急に：

**学年の授業開始： 9月（2期制なら8月後半）**

**学年の授業終了： 7月（2期制ならば6月末）**

現行の会計年度とは乖離があるが、上記の如く、日本の  
学校年度というものを、7月または8月開始とすべきではないか。

以前, 大学教員としての立場から, 似たようなことを申し上げた.  
今回は, さらに, 中学・高校の立場も加え, 恐らくは, 小学校なども同様であらうと思われる十分な理由がある(以下で述べる).

現行の学校年について:

**長所:** 国の会計年度に忠実である.

**短所:** 気候的条件に対応していない. 環境負荷が高い.  
国際基準からの乖離が大きい.

**副作用:** 学年末の忙しさ  
夏休みの忙しさ  
国際集会と授業との衝突  
国際交流における制約の多さ  
入学試験関連の忙しさ

## 学校年が秋開始・初夏終了の場合

**短所:** 会計年度とずれる

移行期間が必要

現行制度前提の諸制度からの抵抗が予想される

**長所:** 日本の教育制度の国際基準化での運営が可能

日本の学校制度を国際的な学校制度のうちに再編できる

例えば、入学者選抜方式が影響を受ける。

また、就職活動も変わってくるはず。

その他、校舎や寮などの維持管理の方式が変更を受けることが予想される。

特に、中高一貫校(経営)の立場では、**関係者の意識の健全化**に伴う**教育の質を重厚にして**、**良質な卒業生の輩出**を図る上で、重要な点ではないか

例えば、本校には寮があるが、夏季休暇が学年と学年の境目に来ると

寮の改修を夏季休暇中に行なうことができる

寮を利用したの数週間程度の泊り込み行事をセールスすることができる

大学の場合も、海外事例と同様に、夏季休暇中に寮を利用してのさまざまな行事が可能になる

校舎等の改装改築も夏季休暇中に行なえば、新入生を美しい状態の校舎に迎えられる

その他:

**入学試験業務も夏季休暇中に行なえる.**

夏季補修を学年と独立に近い形で運営できる.

夏休みが塾や予備校の稼ぎ時になると思うが、今よりむしろ

**学級外活動<sup>う</sup>の全国・国際大会と授業との衝突を減らすことができる**

英語を早期に教育すれば国際化が実現するわけではない.

問題は制度そのものの形なのである.

本来、**文部省(当時)が行なうべきであったことは**、4月新学年という**鎖国的な**制度を維持したままの「ゆとり教育」の推進ではなかったはずで、まず、**現行のこの鎖国的な制度そのものの可否を問うこと**ではなかったか。学力の国際比較も思い込みや誤差・誤解が減っていたはずである。

かつて、その手の話題が新聞に載っていたことがあったが、桜の花の下での入学式云々という、何とも非本質的な不真面目な論調が目立った。当時札幌にいただけにこの手の議論は無神経にしか聞こえなかったことを覚えている。

## 提案の動機:

非常に正直に言うと、**塾の価値観によって少年たちが大変にスポイルされているのを目の当たりにして、何とかしたい**と考えている。

現行の**塾の醸し出す強迫観念**が特に問題である。

しかし、**私立の進学校は塾と共棲している**面もある。  
ただし、**進学校は学校であって、塾とは存立の理由が違う**。

塾がなぜ成立するのか。**日本の学力の問題の本質**はどこにあるのか。

有力な解答は、**学年の構造**が基本的に不自然であり、「鎖国」下ならば目立たなかったが、塾の付けこめる隙が大きくなりすぎるなど、今日の社会では**不自然さが否定できなくなっている**ということだと考える。

**学年についての「鎖国」状態の解消**は、塾の提起した問題への対策としては搦め手のように見えるが、塾以外にも**さまざまな問題の解決に繋がると**信じる。



## Final comments:

もっと着実な問題設定があるとお考えの人も多いと思う。しかし、多くの知恵者がいろいろと試みて、思うような成果が得られていないのはなぜか。根本に狂いがあるかも知れないのに、表面的な手直し対応できると思いつみ、それで自足しているのではないだろうか。

本校のことには触れないとは言ったが、ここだけの話として言えば、ある意味で、特徴的な成功を収めた日本的組織が漂流する事情が典型的に観察されるようなところが本校にもある。

いろいろと素晴らしい教育的な工夫が多いのだが、形骸化が否めないものもある。初心を忘れていると言ってもよいのだが、それはなぜかということである。

成功した事例の条件の分析が行なわれておらず、事例の成立する限界の評価がされていない。理念化・言語化が十分でなく、したがって、技術化の可能性も検討どころか想像もされていない。